完存していた！平安時代の鏡　六稜鏡

平城京跡（左京二条七坊十五坪）・奈良町遺跡　奈良市今小路町

奈良町と京街道　奈良町とは、興福寺・東大寺を中心として栄えた近世都市奈良を指し、東西約1.8km、南北約2.9kmの範囲は、ほぼ奈良市の旧市街地にあたります。

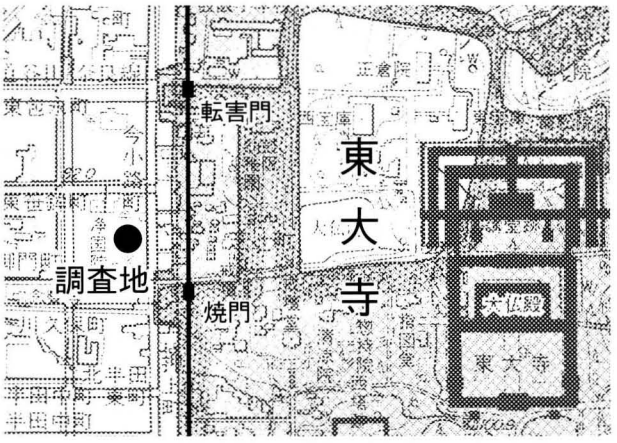
この奈良町と京都を結ぶ街道があり、京街道と呼ばれました。現在の奈良県庁の東から、東大寺を右に見て奈良坂を越えて京都へ向かう国道旧24号線がそれにあたります。この京街道は、奈良時代には平城京の東端の道路である東七坊大路で、道路を挟んで西側が平城京内、東側が東大寺境内となっていました。

今回の調査地の今小路町は、この街道の両側に広がる町で、北は東大寺の転害門から南は焼門に至ります。都が長岡京・平安京に移った後も、「東大寺七郷」の1つ「今小路郷」として記録にあらわれています。奈良観光で賑わっていた江戸時代には、街道沿いの今小路町には多くの旅籠屋が建ち並んでいたと記録されています。

発掘調査でわかったこと　調査地は、今小路町の中央の通りの西に面した宅地部分、つまり平城京内にあたります。調査の結果、奈良時代から江戸時代までの各時代の遺構と遺物が見つかり、今小路町の歴史の一端が明らかになりました。以下に見つかった遺構を年代順に見てみましょう。

奈良時代　掘立柱建物2棟、井戸1基、土器埋納土坑1基、溝1条があります。建物は、中小規模のものと考えられ、井戸からは奈良時代中頃の土器が出土しました。

平安時代　井戸3基のほか、多数の土坑と柱穴が見つかりました。井戸は、平安時代中頃（10世紀前半）と後半（11世紀末～12世紀）のものとがあります。この井戸の1つから後述する唐草双鳥紋六稜鏡と呼ばれる鏡が出土しています。井戸は径約1.0mの平面円形で、底近くでは隅丸方形になります。深さは約1.6mで、枠は見つかりませんでした。鏡の出土状況は不明ですが、土器や瓦とともに井戸の埋土から出土しました。出土した土器から11世紀末に埋められたことがわかります。



調査地位置図（1/10,000）

鎌倉時代　井戸1基と多数の土坑と柱穴が見つかりました。目を引くのが、東西約9.0m、南北約6.4mの平面方形の大きな土坑です。中には何百枚もの土師器皿が捨てられ、その多くは割れずにそのまま出土しています。このような土坑は、奈良町遺跡内でしばしば発見されています。これらの土器は、神前での宴会に用いられた食器と考えられています。このような宴会をとおして、当時の人々は「郷」内の結束をかためていったようです。

室町時代　土坑と柱穴のほか、蔵の跡が見つかりました。蔵の中には、常滑焼と備前焼の大甕が半ばまで埋め込まれて、整然と並んでいたようですが、6個を残して他は持ち去られていました。復元すると、2棟以上の蔵に37個以上の甕があったようです。1つの甕は、径約80～90cmと一抱えもあり、200～300ℓほどの容量があると推定できます。全部の甕が使われたとすると7,000～10,000ℓつまり約10トンの液体が貯蔵できることになります。残念ながら、液体の種類は不明です。

江戸時代　井戸、土坑のほか、石組土坑、石組溝が見つかりました。この時代の今小路町は大きな火災にしばしば見舞われます。調査でも火災を示す焼けた瓦や土が見つかっており、災害を何度もくぐり抜けてきた今小路町の人々の姿が、偲ばれます。

唐草双鳥紋六稜鏡　鏡は、ほぼ完全な状態で出土しました。面径は9.5㎝で、重さは85ｇあります。稜がある円弧6個を連ねた花形の外形で、六稜鏡といいますが、平安時代の鏡の多くは八稜鏡で、六稜鏡は少ないものです。

鏡背（紋様のある面。これに対してものを写す面は鏡面）の紋様は、圏線で内区と外区とに分かれています。内区には、中央の鈕（鈕座）を中心に、鳥と唐草紋を各2個ずつ対称に配置しています。鳥は両方の羽を上に広げ、2本の足は地を蹴っているようです。長い尾も見られますが、鋳上がりが悪く、顔や羽毛の表現が潰れてはっきりしない部分があります。また、外区には、雲のような紋様6個を連ねますが、これも鋳上がりが悪く判然としません。

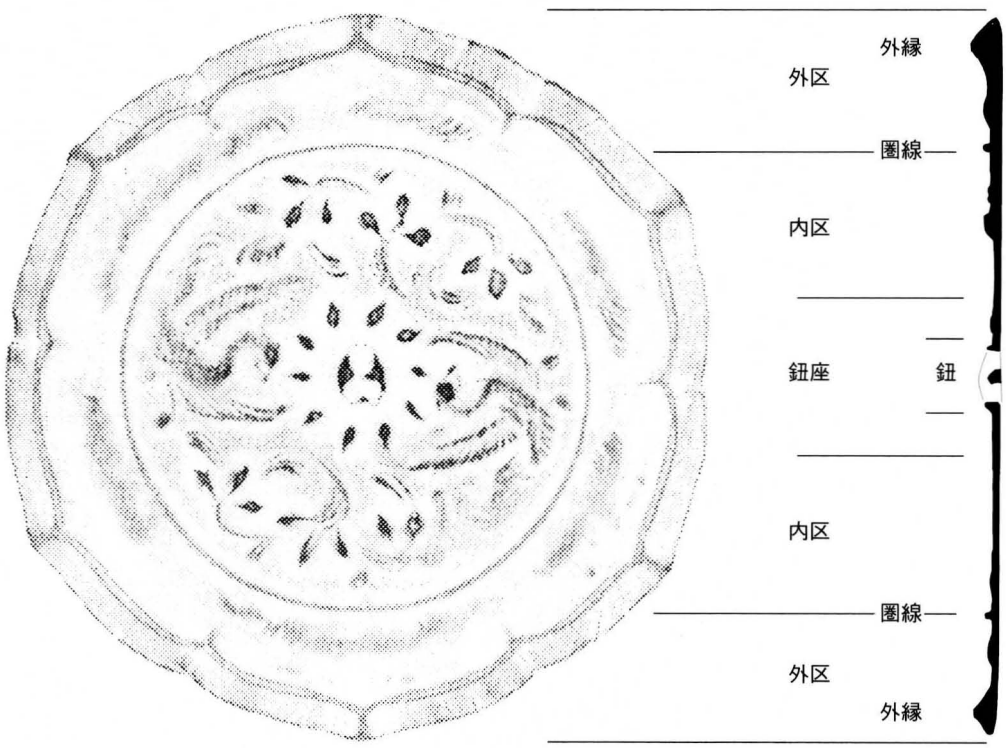
鏡の鋳造　これら鏡背の紋様が鮮明でないことは、当時の鏡製作技術が大きく関わっています。

当時の鏡は、鋳造と呼ぶ技術で作られます。鋳造とは簡単に言うと、鏡の型（鋳型）を作って、それに溶かした金属を流し込んで製品を作る方法です。この鋳型の作り方が時代によって変わることが、これまでの研究で明らかになっています。

今回出土した鏡は「踏返鋳造」と呼ばれる方法で作られています。鏡そのものを、生乾きの粘土に押付け、その紋様を写し取って鋳型を作る方法です。この方法の利点は、1枚の鏡から簡単に同じ複数の鋳型が作れ、同じ物が大量に複製できることです。また複製した鏡からさらに鋳型を作り、複製の複製も作れます。しかし一方で、元となった鏡より紋様の細部が鈍くなり、大きさもやや小さくなる欠点があります。今回の鏡も複製に複製を重ねた結果、紋様の鋳上がりが悪くなったものと考えられます。

このような作り方から脱却して、新たな作り方が、平安時代中頃に発明されます。生乾きの粘土に直接紋様を彫込んで鋳型を作る方法で、彫の深い繊細な紋様を作り出すことができます。しかし、鋳型から鏡を取り出す時に鋳型は壊れるので、この方法では同じ紋様の鏡は1枚しか作ることができません。以後、江戸時代に踏返鋳造が復活するまでこの方法で鏡が作られます。いわゆる「和鏡」です。

今回出土した鏡は、古代の唐式鏡から中・近世の和鏡へとつながる形態をもつものです。



唐草双鳥紋六稜鏡拓影・断面図（原寸大）

発行　奈良市教育委員会　平成18年3月6日